

神の栄光

「【主】の栄光がケルブの上から上り、神殿の敷居に向かうと、神殿は雲で満たされ、また、庭は【主】の栄光の輝きで満たされた。」(エゼキエル書10:4)

神の栄光の定義

「神の栄光」ということばは聖書の中ではいくつかのかたちで用いられている。

(1) 時には神の輝き(光り輝く姿)と荘厳さと威光を指している(⇒Ⅰ歴29:11, ハバ3:3-5)。けれども人間のことばでは神の最高の栄光を十分に描き出すことはできない。それはあまりにも超自然的に優れており、だれも直接神を見て(顔と顔を合せて)生きていることができないからである(出33:18-23)。人間はせいぜい「主の栄光のように見えた」(⇒エゼキエルの神の御座の幻 エゼ1:26-28)ものを見ることができに過ぎない。神の栄光は神の特異性と聖さ(純粋性、完全性、完璧性、悪からの分離 ⇒イザ6:1-3)、神の超越性(造られたものではなく、自立していて、あらゆる面で偉大なこと ⇒ロマ11:36, ヘブ13:21)の充満を現している。ペテロは神を「おごそかな、栄光の神」と言っている(Ⅱペテ1:17)。神の特性について →「神の属性」の項 p.1016

(2) 神の栄光は神の民の間に現される目に見える神の臨在を指している。これは時に「シェキーナー」の栄光と呼ばれた。「シェキーナー」は「神の住まい」を意味するヘブル語で、神の臨在と栄光の目に見える現れを描写している。モーセとイスラエル人は神の「シェキーナー」の栄光が雲と火の柱の中にあって昼も夜も導くのを見た(出13:21)。出エジプト記29章43節では幕屋(可動式の「会見の天幕」で礼拝の場所)での臨在を「わたしの栄光」と神は言っておられる(⇒イザ60:2)。「シェキーナー」は神が律法をモーセに与えられたときにシナイ山をおおった(⇒出24:16-17注)。そして幕屋が完成したときにそこを満たした(出40:34, →「幕屋」の図 p.174)。荒野でイスラエルを導き(出40:36-38)、後にソロモンの神殿が献堂されたときにそこに満ちた(Ⅱ歴7:1, Ⅰ列8:11-13, 「ソロモンの神殿」の図 p.557)。さらに神は神殿の至聖所の中でケルビム(契約の箱の上にある天使の姿)の間に臨在がとどまるようにされた(Ⅰサム4:4, Ⅱサム6:2, 詩80:1, 「神殿の備品」の図 p.557)。エゼキエルは偶像礼拝(まことの神の代りに人間が作った神々やほかのものを拝むこと)が広まったために、主の栄光が神殿から上って去っていくのを見た(エゼ10:4, 18-19)。新約聖書では「シェキーナー」の栄光は人々の間に住むために来られたイエス・キリスト(人間の肉をまとった神の栄光)の臨在と同じであるとしている(ヨハ1:14)。ベツレヘムの羊飼いたちは主イエスの誕生のときに主の栄光を見た(ルカ2:9)。弟子たちはキリストの変貌のときに見た(この体験の説明 →マタ17:2-8, Ⅱペテ1:16-18)。そしてステパノはキリストを信じる信仰のために殺されるときに見た(使7:55)。

(3) 神の栄光は聖書の中では、神の聖い臨在と力、世界と人々の生活の中に現された臨在と力の影響として表現されている。「天は神の栄光を語り告げ」(現す、証拠を示す 詩19:1, ⇒ロマ1:19-20)、全地は神の栄光で満ちている(イザ6:3, ⇒ハバ2:14)けれども、主の偉大さと威光の輝きの全容はまだ完全には現されていない。そのため人々は神の偉大さをしばしば見過している。その結果神の臨在をあって当り前のものと考えている。けれどもキリストに従う人々は神の栄光と臨在を主の近さ、導き、愛、力、知恵、祈りの応え、御霊の賜物(神から与えられる能力)、聖霊の超自然的働きなど多くのかたちで体験することができる(⇒Ⅱコリ3:18注, エペ3:16-19注, Ⅰペテ4:14注, →「聖霊の賜物」の表 p.2096)。

(4) 旧約聖書は偶像礼拝(まことの神の代りに人間が作ったにせの神々やほかのものを拝むこと)はどれも神がそこにおられないかのように神の栄光を押し戻したり押し除けたりするものとして警告している。偶像礼拝は神の名前をはずかしめる(→「偶像礼拝」の項 p.468)。神が贖い主(救い主、霊的解放者)としてご自分を現すときには神の名前があがめられる(→詩79:9, エレ14:21)。キリストの地上での働きはみな神の栄光と栄誉を現すものだった(ヨハ14:13, 17:1, 4-5)。

イエス・キリストの中に現された神の栄光

イエス・キリストの来臨について預言したとき、イザヤはイエス・キリストの中に神の栄光が現されて全人類がそれを見ることができるようになると言っている(イザ40:5)。ヨハネも(ヨハ1:14)ヘブル人への手紙の著者も(ヘブ1:3)、イエス・キリストはこの預言を成就したと証言している(→「キリストによって成就した旧約聖書の預言」の表 p.1029)。キリストの栄光は世界が始まる前に御父(神)とともに持っておられたのと同じ栄光だった(ヨハ1:14, 17:5)。キリストの働きの栄光は旧約聖書にあるどの働きの栄光よりはるかにまさるものだった(Ⅱコリ3:7-11)。パウロは主イエスを「栄光の主」と呼び(Ⅰコリ2:8)、ヤコブは「私たちの栄光の主イエス・キリスト」と呼んでいる(ヤコ2:1)。

新約聖書は繰返しイエス・キリストと神の栄光との関係、切ることのできない結びつきを指している。キリストの奇蹟は神の栄光を現している(ヨハ2:11, 11:40-44, →「キリストの奇蹟」の表 p.1942)。キリストは「光り輝く雲」(→マタ17:5)の中で姿を変えられたけれども、それはご自分の光り輝く栄光を目に見えるかたちで示されたものだった。御父である神は御子イエスを尊ぶように弟子たちが聞いて理解できることばで語りかけて、この出来事が確実なことを示された(⇒Ⅱペテ1:16-19)。キリストは近付いている死は栄光を受けるときの始まりだと言われた(ヨハ12:23-24, ⇒17:2-5)。復活の後、キリストは天の栄光に上げられた(⇒使1:9, Ⅰテモ3:16)。今キリストは栄光の中に上げられ(黙5:12-13)、やがて「大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って」再び来られる(マタ24:30, ⇒マタ25:31, マコ14:62, Ⅰテサ4:16-17)。

神の民が生活の中で体験した神の栄光

神の栄光は従う人々にどのような影響を与え、個人的にどのように適用されるのだろうか。

(1) 神の栄光をまともに見た人は生きていくことができない。栄光がそこにあることを知っていてもそれを完全に見ることはできない。神は光と栄光の中に住んでおられるので、人間はだれひとり顔と顔を合せて見ることができないと神のことばは示している(Ⅰテモ6:16)。けれども神は人間が見えるように栄光を二つの方法で現された。「教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように」(エペ3:21)。つまり神はご自分とみわざを御子イエスを通し、また神の目的に仕え神を礼拝するために集まる忠実な人々の生活を通して現される。それは聖霊がその人々の中に住み(Ⅰコリ3:16, 6:19, Ⅱコリ6:16)、その人々の中で働いておられるからである(→「聖霊の働き」の表 p.2187)。

(2) 聖書の時代のある人々は神の「シェキーナー」の栄光を体験した(→前述「神の栄光の定義」)。今日までの歴史を通じてイザヤ(イザ6:)やエゼキエル(エゼ1:)のように幻を見た人々もいた。けれどもこれは当時も今も一般的なことではない。神の栄光の完全な姿は神の民全員が主イエスと顔と顔を合せて見る日まで体験することができない。神が計画された霊的救いの最終目標は忠実な人々が栄光ある臨在の中に入れられ(ヘブ2:10, Ⅰペテ5:10, ユダ1:24)、キリストの栄光にあずかり(ロマ8:17-18)、栄光の冠を受けることである(Ⅰペテ5:4)。その復活のからだは復活したキリストの栄光を示すものである(Ⅰコリ15:42-43, ピリ3:21, →「肉体の復活」の項 p.2151)。

(3) 現在主イエスに従う人々は神の臨在を聖霊の力と働きを通して体験する。聖霊は神の臨在と主イエスを身近に感じられるようにしてくださる(Ⅱコリ3:17, Ⅰペテ4:14)。聖霊が超自然的な賜物と働きを通して教会の中(キリストに従う人々の間)に力強く働かれるとき(Ⅰコリ12:1-12)、人々は神の栄光を否定できないほどはっきりと見、体験するようになる(→「御霊の賜物」の項 p.2138)。

(4) キリストと罪のための犠牲を受入れて生涯をキリストの導きにゆだねた人々は今や御霊によってキリストと一つにされ、キリストの栄光にあずかるものになっている(→ヨハ17:22注)。ペテロは大胆にキリストと一つになり、その信仰のために苦しみを受けている人々に「栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださる」(Ⅰペテ4:14)と言っている。主イエスがこの世界に来られた理由の一つは人々に栄光を現すことだった(ルカ2:29-32)。神が私たちの中で私たちを通してあがめられほめたたえられるように、主イエスに従う者として私たちは神の栄光のために全生涯を送らなければならない(ヨハ17:10, Ⅰコリ10:31, Ⅱコリ3:18)。